

## 川霧に浮かぶ家

山田源太郎さん（昭和 18 年生 霧幻亭主 神川県）

山田稔さん（昭和 18 年生 霧幻館主 神奈川県）

奥会津を流れる只見川に広がる川霧の向こうに、2 軒の青い屋根の家がある。

霧幻館と霧幻亭と名付けられた古民家は、現在神川県に住むお二人により再生された。



そこにはかつて、金山町三<sup>みふけ</sup>更という集落があった。

昭和 39 年 4 月の山崩れで 10 軒あった家は埋め尽くされ、住民は各地に分散して移転した。

その中で少しだけ離れた 2 軒の建物が、かろうじて残っていた。

源太郎さんは高校生の頃、毎年夏休み合宿で長野県の古い家に通っていた。

そこに漂うどこか懐かしくて、心地よい、“昔のかおり”が大好きだった。

「愛着を感じる古い家が潰されていくことが、寂しかった…」。

39 歳の頃、田舎物件情報誌で紹介されていた金山町三更の物件に一目惚れし、足繁く通う中で持ち主から所有を許された。

「目の前の只見川の景色と、黒く光る床の色、持ち主のツギコさんの人柄に惹かれた」。

当時はまだ田舎暮らしや古民家暮らしは、あまり注目されてはいなかった。

「憂えているだけではダメだ。1 軒だけでも自分の手で守りたい」。

それから約 20 年間、2 か月に 1 回 1 週間ほどの滞在で、一人でコツコツと、少しずつ壊れたところに手を加えていった。

「前の主が「家が黒いのが嫌」という理由で、壁も天井も室内にベニヤが貼られていた。剥がす作業だけでも大変だった」。

今からは想像できないくらい朽ちていた家も、解体現場から貰ってきた古材を使って張替えし、20 年かけて何とか自分が納得できるくらいに再生するまで辿り着いた。

電気、ガス、水道は無く電話も通じない山奥の一軒家との格闘だった。

そんな時、地元で知り合った稔さんと、古民家話で意気投合した。

「豊かな自然の中で何をやっても周りに迷惑を掛けずに自由に遊べる場所ができる！」

2010 年、霧幻館は次なる古民家（霧幻亭）再生に関心が移っていた源太郎さんから、稔さんの手に託された。



ちょうど三更の隣、雨沼地域を中心に地域活性化の“霧幻峡プロジェクト”が動き始めた時期だった。

地元の人々の協力も加わり、ひっそりと佇んでいた霧幻館は、只見川の川霧景色になくってはならない存在になっていった。

「電気もないから、暗くなったら寝て、陽が昇ってきたら目を覚ます。虫も獣も出入り自由だし、囲炉裏の火があれば大体のことはできる」。

不便なことはあるけれど、それを楽しむための場所でもある。

「訪ねてくる人も限られるし、本当に自由気まま。この空間だからできる暮らしで解放されることがある」。



霧幻館を訪れるたびに、地元の人、友人、移住者を集めて囲炉裏を囲んでワイワイ酒を呑み交わす。

「ここを訪れる人の出逢いを大切にしたい。奥会津のこの景色を楽しみ、面白い想いを持った人が交流する場所にしたい。」

三更集落に住んでいた人がいて、古民家維持に協力してくれる地元の人や、遊びに来てくれる人がいる。

「これからも、霧幻館がきっかけで繋がる縁があったら、嬉しい」。